

氏名(本籍)	おおくらひろし 大倉浩(茨城県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博乙第2319号		
学位授与年月日	平成19年10月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	日本語史資料としての狂言記の研究 -用語および語法の比較を中心に-		
主査	筑波大学教授	博士(言語学)	坪井美樹
副査	筑波大学教授		稲垣泰一
副査	筑波大学准教授		橋本修
副査	筑波大学講師	博士(言語学)	那須昭夫
副査	京都女子大学文学研究科教授	博士(文学)	湯沢質幸

論文の内容の要旨

本論文は、江戸時代に出版された狂言台本「狂言記」について、日本語史資料としてどのような特徴を持ち、日本語史研究上どのように位置づけられるかを考察したものである。

本論文の構成は以下のとおりである。

はじめに 狂言資料の中での狂言記

第一部 書誌を中心に

第一章 狂言記四種と諸版

第二章 四種の関係について

第三章 『当流童子小うたひ并狂言記入』収載の狂言記について

第四章 「しぎ(仕儀)」と「てうぎ(調儀)」-正篇万治版と元禄版

第二部 用語および語法の比較

第五章 「おりやる」と「おぢやる」

第六章 サ行四段動詞のイ音便形

第七章 「わする(座する)」

第八章 連声表記

第九章 妻の呼称

第十章 代名詞「おまへ」

第十一章 正篇の「おっしゃる」

第十二章 外篇の「まらする」

第十三章 『かたこと』との対照

第三部 他台本と狂言記

第十四章 祝本狂言集と狂言記

第十五章 天理本と和泉家古本－和泉家古本による狂言用語の整理・統一

おわりに まとめと今後の課題

「はじめに」では、従来狂言資料として一括りにされてきた狂言諸流派の台本群と版本狂言記について、日本語史資料としての観点からそれぞれを区別し、その言語上の特質を位置づけようとする著者の立場と目的を明らかにする。

第一部では、正篇・続篇・外篇・拾遺の四種がそれぞれ異版を持ちつつ複雑な関係にある狂言記諸本について書誌学的な検討を行う。

第一章は、四種存在する版本狂言記の書誌を著者の調査を中心に整理し、刊記の書肆名や当時の書籍目録などから四種の狂言記の関係を考える手がかりを明示する。第二章は、正篇の異版が外篇・続篇とのつながりを持つこと、拾遺の刊行以後は横本三種が主に再刊されていくこと等を確認し、四種の狂言記の関係について著者の推定を示す。第三章は、『当流童子小うたひ并狂言記入』という文献に収載されている狂言記本文について検討し、四種の狂言記の関係についての著者の推定の傍証とする。第四章は、版本間の「しぎ（仕儀）」と「てうぎ（調儀）」という類義・相似形の語句の諸本間の異同をとりあげ、諸本間の関係を論ずる。

第二部では、第一部での書誌学的な検討を踏まえ、内部徴証たる狂言記に現れる用語や語法の分析を行い、その作業を通じて狂言記の日本語史資料としての特質を描き出す。その際、各篇・各版の違いだけではなく、個々の狂言各曲にまで分け入ってその特徴が記述される。

第五章は、狂言詞章の中で特殊な伝承を持つ「おりやる」「おぢやる」に注目し、狂言記四種二百番の曲の分類を行い、十七世紀後半に「おりやる」専用へと詞章を統一していった大蔵流・和泉流狂言台本に対して狂言記中になお「おりやる」「おぢやる」併用の曲が見られることを指摘し、その特徴を記述する。第六章は、同じく十七世紀以降一般の日本語では衰退し、大蔵流の狂言台本では保存されているサ行四段動詞イ音便形について調査し、この点では狂言記におけるサ行四段動詞イ音便形の出現が少ないことを報告し、その詞章の独自性を指摘する。第七章は、大蔵流で使用が減少する一方、和泉流では保存される動詞「わする（座する）」について見ると、狂言記においては大蔵流と同じく排除される流れが見られることを明らかにする。第八章は、連声表記の出現の有無について調査し、その出現傾向が曲単位で偏ることを明らかにし、狂言記詞章が複雑な伝承過程を持つことをうかがわせる事象であるとする。第九章は、伝統的な「かみさま」に対して「おかさま」のような狂言記独特の妻の呼称が見られることを報告する。第十章は、大蔵流ではほとんど用いられない対称の代名詞「おまへ」「おまへさま」の狂言記中の使用例を検討し、出現する曲の偏りを論ずる。第十一章は、狂言記正篇にのみ見られる「おっしゃる」という語に注目し、正篇刊行当時の一般日本語における使用の反映であると主張する。第十二章は、狂言記外篇に見られる「まらする」の使用の有無が、外篇各曲の出自・伝承を考えるうえでの指標になることを指摘する。第十三章は、狂言記正篇とほぼ同時期に成立した安原貞室著『かたこと』の記述と照らし合わせ、成立当時の口語性の強い語が正篇に取り込まれていることを確認する。

第三部は、狂言詞章が固定化する時期前後の狂言台本と狂言記との関係を論ずる。

第十四章は、狂言記と同じく流派不明とされる祝本狂言集について狂言記との比較を行い、相互の相違の多さを指摘する。第十五章は、和泉流での詞章整理の動きを確認し、狂言記との関係を論ずる。

「おわりに」では全編の考察をまとめ、狂言記においては、個々の曲によって詞章の言語的性質が異なることを確認し、狂言記を日本語史資料として用いる場合に留意すべき点を整理し、さらに残された課題と今後の展望を述べる。

審査の結果の要旨

日本語史研究は、文献資料に基づいた言語事実の収集・考察によって進められる。一方また、ある文献資料に見られる言語事実がいつの時代のどのような日本語の姿を反映するものであるかは、日本語史研究の進展そのものによって明らかにされる。言語事実の収集・考察と文献資料の性質解明は、相互に支えあいながら螺旋状に進化していく関係にある。

日本語史研究にとって狂言台本は、中世後期から近世にかけて自然に口頭で話されていた日本語の姿をうかがうことのできる貴重な資料として定評のあるものである。しかし、言語資料としてのその性質が解明されていたものは、主に江戸時代初頭以前の各流派に伝承された狂言台本に限られ、江戸時代前・中期に刊行された四種の狂言記については、有名なわりに言語資料としての性質解明が遅れていた。その最大の理由は、狂言記が明確な流派に属する台本の刊行ではないこと、また、そもそも上演のための台本ではなく読み物としての刊行であること等により、その言語上の性質が一様でないことであった。

本論文は、この狂言記の持つ言語資料としての複雑さに果敢に挑戦し、狂言記四種に載せられている個々の曲にまで分け入ってその言語的性質の解明を試みたものである。著者の綿密で粘り強い検討の結果は、本論文第二部末尾に掲載された各曲対照表に集約されている。今後狂言記を言語資料として用いる者は、本論文の各曲対照表を参観することによって、当該の言語事実が現れる曲の詞章がどのような伝承過程と言語的性質を持つものかを考えることができるようになる。本論文は、この点で今後の日本語史研究に寄与するところ極めて大なるものと評価できる。

本論文は、上述のように、基本的に狂言記という文献資料の性質の解明を目指したものであり、狂言記を用いて日本語史上の問題を直接論じようとしたものではない。しかし、実際に比較考察の過程で本論文で取り上げた言語事象、例えば「おりやる」と「おぢやる」、「おしゃる」と「おっしゃる」などの狂言台本上の出現分布は、それ自体興味深い日本語史上の事実の報告ともなっており、今後、著者自身による狂言記を資料として用いた日本語史研究の進展が期待されるものとなっている。このこと自体が今後の課題でもあるが、資料論としても、どのようにしてこのような複雑な狂言記の詞章が成立したのか、等の問題がなお残っている。しかし、このような課題は、本論文を土台とした著者の今後の研究の発展によって解明されることが十分期待できるものであり、本論文自体の評価を貶めるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。